

高次脳機能障害者の特徴に応じた補完方法の開発に係る取組 －記憶障害・失語症について－

障害者職業総合センター職業センター開発課

1 はじめに

障害者職業総合センター職業センター（以下「職業センター」という。）では、高次脳機能障害のある休職者を対象とする職場復帰支援プログラム（以下「復帰プロ」という。）と求職者を対象とする就職支援プログラム（以下「就職プロ」という。）を実施しながら、障害理解の深化、障害の補完方法と対処行動獲得のための支援技法を開発し、地域障害者職業センターをはじめとする地域の就労支援機関等に対して伝達・普及を行っている。

高次脳機能障害の代表的な特性として記憶障害、注意障害、失語症等があげられるが、これらの障害を補完する方法については、支援マニュアルNo.11「高次脳機能障害者のための就労支援～対象者支援編～」（平成26年3月発行）により取りまとめているところである。

本レポートでは、当マニュアルを補足するものとして、記憶障害、失語症に対する補完方法の開発に関する取組を報告する。

2 記憶障害の特徴に応じた補完方法の開発

（1）記憶障害の特徴

記憶とは、経験を貯蔵し必要に応じてそれを取り出す操作である。その過程は記録・保持・再生に分類されるが、この過程のどこかに問題がある場合を記憶障害と言う。

職業リハビリテーション場面で観察される記憶障害の特徴は、以下のとおりである¹⁾。

- ① 作業手順や、必要な道具の種類や置き場所がなかなか覚えられない。
- ② 作業手順やルールが変更されたときに、変更前のものと何度も間違える。
- ③ メモを書いても、書いたこと自体を忘れてたり、どこに書いたかが分からなくなったりする。
- ④ 障害の自覚が不足している人の場合は、周囲がメモを勧めても、「このくらいは大丈夫、憶えられる」と自分の記憶力を過信する。
- ⑤ 障害の自覚が強い人の場合は、何か大事なことを忘れていないか？と不安をいつも感じ、その不安から必要性の少ない内容まで細かくメモをする。

（2）メモリーノートの改良

記憶障害の補完手段として、職場でのスケジュールや作業手順等の情報管理にはメモリーノートが有効な場合が多い。メモリーノートには様々な様式のものがあるが、復帰プロ及び就職

プロでは主としてM-メモリーノートを活用している（図1）。

紙ベースのメモリーノートには、①費用があまりかからない、②どのような職場にも持ち込みやすい、③いつでもその場で記入できる等の利点があるが、対象者がメモリーノートを活用するためには、①記入する箇所と内容を明確に決め、対象者と支援者・職場の者が共有すること、②記入や参照の練習をする機会を十分に提供すること、③必要な情報をコンパクトにまとめて持ち運びしやすくすることが重要である。²⁾

なお、以下は、メモリーノートの誌面を混乱なく記入できる構成にしたことで就職プロの受講者がメモリーノートの有用性を実感し活用を継続している事例である。

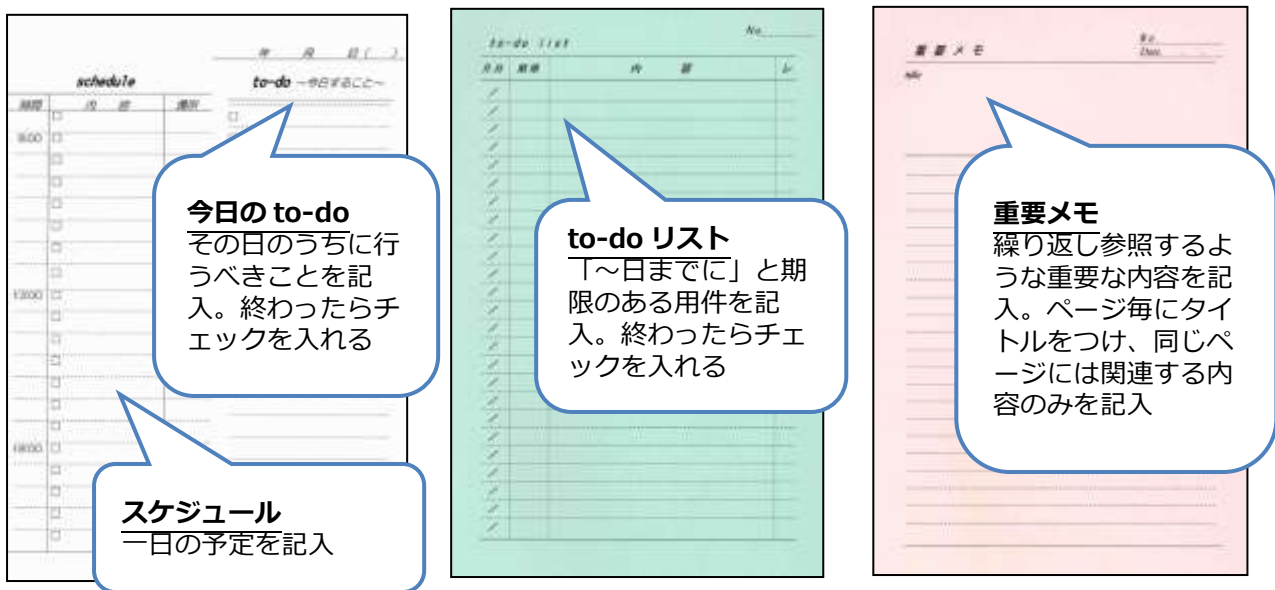


図1 M-メモリーノートの基本リフィル

【事例】

プログラム受講者Aは、情報を整理せずに記入するため、「どこに」「何を」書いたか分からなくなる、記入した内容の確認を忘れる、行動記録を残さないため予定の進捗状況が分からなくなることが多く、周囲からの声かけが必要であった。

そのため、聞いた情報を直接記入することができるページを設けることが有効であると考え、スケジュールの右ページを自由メモ欄とし、一時的に記入した後に、左ページの適切な箇所に転記する方法を提案した（図2）。

また、スケジュールの進捗確認については、記入項目の行動が終了した時点で受講者Aが自ら都度し点チェックを記入するルールを設けるとともに、チェックの失念や記入のタイミングの誤りが見られたため、時間を決めて進捗状況を確認する方法を提案した。

この取組により、受講者Aはメモリーノートの効果的な活用方法を理解し習慣化が図られ、行動管理や作業における混乱が軽減された。

なお、時間が経過すると補完方法を失念する場合があることから、就職の際にはジョブコーチが職場の理解や配慮が必要な内容を事業所に伝達し理解を図った。このことにより、受講者Aはメモリーノートの活用を継続し、自らスケジュール管理をしながら作業を進めることが可能となり、職場定着に繋がっている。

(2) 連絡カードの活用

失語症の程度が重度の場合、職場での基本的なコミュニケーション（指示理解、報告、相談）に支障を生じることから、対象者との意思疎通のコツを職場に伝達するために、支援者が相談場面などを通じて会話のコツをつかむことが必要である³⁾が、対象者が職場等において言語で伝達することが求められる場合は、補完方法を検討することも必要である。

以下は、復帰プロの受講者が円滑かつ適切に意思を伝達できるための連絡カードを作成した事例である。

【事例】

プログラム受講者Bは、言いたい言葉が出てこない、発音が聞き取りにくい、一単語での説明となる、「はい」「いいえ」を言葉や首の振りで表現するなどの特徴がある。職場復帰にあたって事業所からは交通機関を使用した単独通勤ができることを求められていたため、通勤途上で駅員や通行人等に対し伝達しなければならない状況が発生した際の補完方法が必要であった。

そこで、通勤途上で想定される必要な語句を連絡カードとして取りまとめ（図3）、携行できるようストラップ付きのカードケースに格納した。

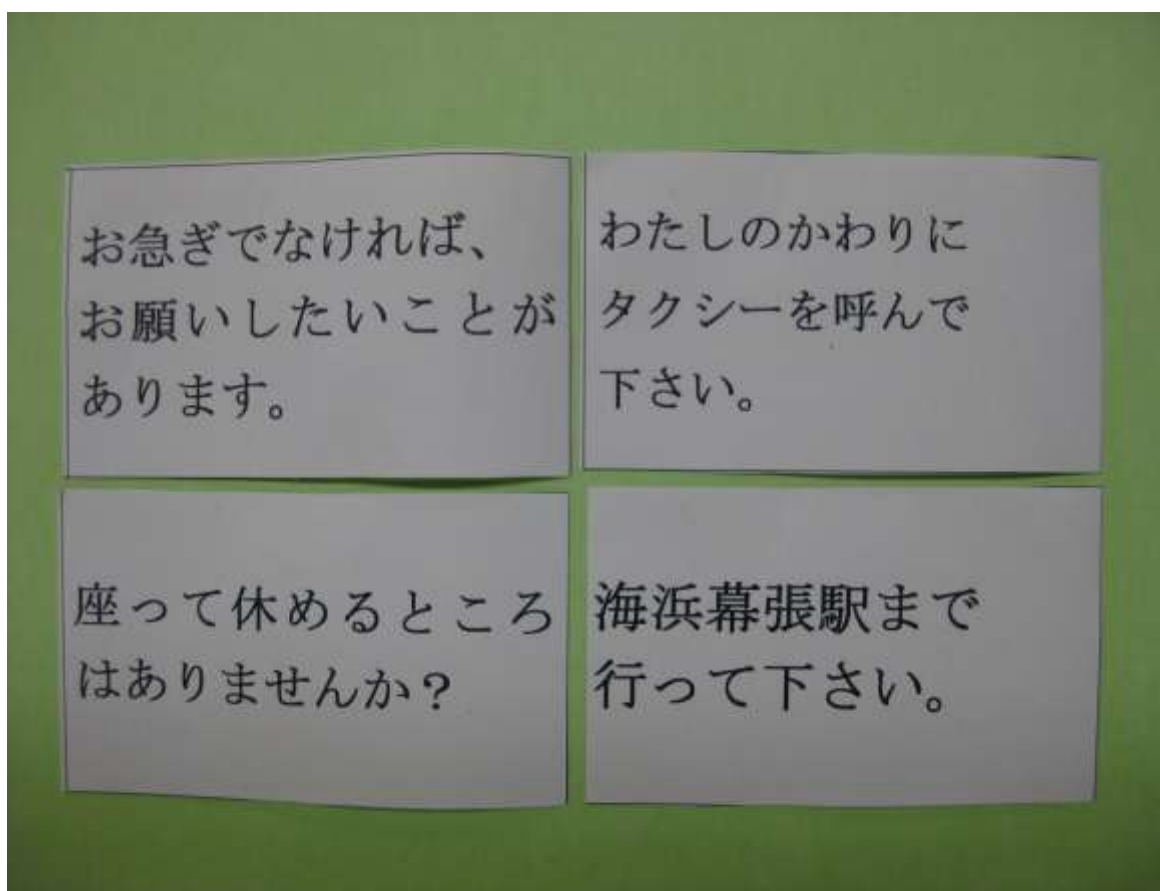


図3 連絡カード

この取組に対し、受講者Bはプログラムからの帰宅時にタクシーの運転手に行き先を伝える際に、妻の見守りを受けながら住所を記載した連絡カードを提示し、連絡カードを活用する必要性を感じているところである。

なお、受講者Bが復帰する事業所においては、本人の特徴について理解していることから、挨拶や報告については、動作や雰囲気や周囲が本人の意思を理解することが期待できるが、受講者Bが自発的に伝達しなければならない場面の対応として、事業所に対して連絡カードの効果などを説明し、職場内の活用について提案をしている。

5 まとめ

本レポートでは、高次脳機能障害の2つの特徴に応じた補完方法を開発した事例を報告したが、いくら有用な補完方法を考案、選定しても、それを使用する対象者が負担を感じては習慣化しにくいことに留意する必要がある。

受講者Aの事例で報告したメモリーノートのカスタマイズについても、記入することに対し負担感を持つほか、記入自体が困難な者も少なくない。そのような場合には、ボイスレコーダーとの併用、携帯電話（スマートフォン）におけるスケジュール管理アプリケーション等の代用が有効であることもあり、特にスケジュール管理アプリケーションについては、今後プログラムにおいて受講者が活用方法を習得するための支援に取り組んでいきたい。

また、対象者が補完方法の習得に積極的に取り組み、効果的に活用するためには、対象者に対する適切なアセスメント、対象者への障害理解の促しと一体的に行うことが重要と言える。アセスメントは、支援者が対象者の状態を把握することが目的である一方、対象者がどのような場面で困り感があるのか自覚を促す、すなわち障害理解を促す一助にもなり得る。

職業センター開発課は、高次脳機能障害を有する休職者及び求職者に対し、一人一人の障害の特徴に応じた補完方法の開発とその習得に係る効果的な支援について今後も取り組んでいきたい。

引用文献

- 1) 障害者職業総合センター職業センター：「支援マニュアル No. 11 高次脳機能障害者のための就労支援～対象者支援編～」．障害者職業総合センター職業センター，15，（2014）
- 2) 障害者職業総合センター職業センター：「支援マニュアル No. 11 高次脳機能障害者のための就労支援～対象者支援編～」．障害者職業総合センター職業センター，15-16，（2014）
- 3) 障害者職業総合センター職業センター：「支援マニュアル No. 11 高次脳機能障害者のための就労支援～対象者支援編～」．障害者職業総合センター職業センター，19，（2014）